

OAと図書館

IRは研究を支えるインフラとなり得るか？

常磐大学人間科学部
栗山 正光

第5回 SPARC Japan セミナー2012
2012年10月26日(金)
@国立情報学研究所

プチ「坂の上の雲」

- 1980年代はコンピュータによる図書館業務の変革期
 - 通常業務の機械化
 - カード目録からオンライン目録へ
 - 抄録索引誌から文献情報データベースへ
- 全国規模のオンライン共同目録及びILLシステムの構築
 - NACSIS-CAT/ILL
- 業務効率の劇的改善に成功

電子化の流れは止まらず

- 目録情報から本文自体の提供へ
- 電子図書館プロジェクト
 - いくつかの大学図書館に予算措置
 - 紀要と貴重書の電子化、画像による提供
 - NACSIS-ELS(学会誌の電子化)
- 電子ジャーナルの導入
 - コンソーシアムによる価格交渉とビッグディール
 - シリアルズ・クライシスは未解決
- モヤモヤを抱えたまま次のステージへ

大学図書館の新たな目標

- オープンアクセス(OA)擁護と機関リポジトリ(IR)構築
 - IRとは自機関の研究成果をOAで提供する電子アーカイブ
- 肝心のコンテンツがなかなか集まらないのが世界共通の悩み
- 海外では研究者に対するOA義務化の動きが高まる(研究助成機関による、大学による)
- 日本では義務化を行っている機関はほとんどない→PR活動により地道にコンテンツ拡充を図っている(ひたひた)

支援と連携

- 学術機関リポジトリ構築連携支援事業(NII)
 - JAIRO (日本のIRコンテンツ横断検索サービス)
 - JAIRO Cloud (IRシステム環境提供サービス)
 - 委託事業 (2005年～)
 - 公募によりさまざまな事業を委託
 - (例) 数学ポータル構築 (北大)
 - 機関リポジリアウトプット評価標準化 (千葉大)
 - 全国遺跡資料リポジトリ (島根大)
- デジタルリポジトリ連合 (DRF) 支援

デジタルリポジトリ連合(DRF)

- 日本の機関リポジトリ設置機関による自主的な
連合組織
 - 144機関が参加(2012年10月現在)
 - 事務局は北大図書館
- メーリングリスト, Facebookによる情報交換
- イベントの開催
- 研修の実施
- PR誌の発行
- 国際会議への参加
- 海外文献の翻訳など

IRは研究を支えるインフラとなり得るか？(1)

- これまでの事業は図書館の内部で努力すれば成果が上がるものだった(一応)
- IRは研究者、出版業界、研究助成団体の動向に大きく依存
 - グリーンOA義務付けがあれば存在感を増す
 - ゴールドOAが進展すれば存在意義を失う(?)
 - 巨大蛇(邪)鳴
- 関係者との密接な連携が不可欠

IRは研究を支えるインフラとなり得るか？(2)

- 正規の出版を補完する重要な役割、特に研究データや灰色文献へのアクセス、あるいはデジタル保存といった役割を果たすよう、主題および機関リポジトリのインフラが整備されるべきである。

– [Finch Report](#)より

– 図書館がやれ、とは書いてない

IRは研究を支えるインフラとなり得るか？(3)

3. インフラと持続可能性について

3.1 すべての高等教育機関は、OAリポジトリを持つか、コンソーシアムのOAリポジトリに参加するか、OAリポジトリ・サービスのアウトソースを手配するかすべきである。

– [BOAI10](#)より

– 図書館がやれ、とは書いてない

なぜ図書館員はOAに肩入れするのか？

- OAと雑誌価格の高騰はからみ合っているが基本的に別問題
- OAにより購読誌の提供とILLによる補完という図書館のビジネスモデルは崩壊
- すべての読者にその本を
- すべての本にその読者を
- 読者の時間を節約せよ
 - ランガナータン「図書館学の5原則」より